

からふるカフェ Season 6 報告

ひきあつこ
比企敦子
マイノリティ宣教センター運営委員

4 回のカフェでは、率直な思いを伺うだけでなく活動へのヒントも示されたように思いました。

第 1 回イマミ・モハメド・ユノス さんはアフガニスタンより 1992 年に来日し、難民申請中。昨年、関東在住のアフガニスタン人社会を支える団体 JASA を設立。在留資格なしに収入を得ることは至難で、追い詰められて自死する人もいます。入管の保証人も足りません。国会議員の支援は心強く、イベントにはぜひ参加してほしいそうです。

第 2 回三木幸美さんはフィリピンと日本のルーツをもち、現在は「とよなか国際交流協会」で、多様な背景をもつ子どもたちを励ますプログラムを実施しています。8 歳まで「無国籍児」として育った経験を元に、多文化共生の豊かさをめざして活動しています。

第 3 回鄭優希（チャン・ウヒ）さんは 1994 年東京生まれの在日朝鮮人 3 世。小学校は朝鮮学校、中高は韓国学校で、キリスト教系大学を卒業。現在早稲田奉仕園に勤務する傍らクィアのアクティビストとして、若者たちが集まり入管運動や関東大震災朝鮮人虐殺の記憶継承にも取り組んでいます。

第 4 回ナビーンさんは 1981 年スリランカ生まれ。政治的理由で父親が殺害され、約 20 年前に来日。日本語学校入学後に学校が「倒産」。オーバーステイとなり入管に 3 度収容され、ひどい処遇を受け体調を崩しました。日本女性と 11 年間の交際の末 2016 年に結婚しましたが、入管から「偽装結構」を疑われ現在 2 度目の難民認定を申請中。

個人で乗り越えられる壁だけではなく、日本社会にある「排除」の壁も明白です。ナビーンさんが力説されるように、共に生きる「納税者」として迎え入れる事がなぜできないのでしょうか。

2025年度より運営が変わります

よしたか かのう
吉高 叶
マイノリティ宣教センター副理事長

マイノリティ宣教センターの働きをいつも覚えてご支援くださり感謝します。2025 年度のセンターの働きにもご期待ください。

2024 年度までは、2 名の共同主事（デイビッド・マッキントッシュ主事、渡邊さゆり主事）が、ほとんどのプログ

ラムの推進を担当してきましたが、2025 年度からは 5 名の方々にセンターのプログラムを担っていただくことになりました。そこに、主事と職員（いずれも非常勤）とが加わり、7 名のチームでセンターの活動を推進します。全員が理事会よりそれぞれの働きを委託されていくかたちですが、担当者それぞれが委託されたプログラムに集中し、これまで同様、中味の濃いものにしていききたいと思います。

「つきいち広場」「リーディング・サークル」「マイノリティ・セミナー（仮称）」「からふるカフェ」「マイノリティ・カフェ」「マイノリティ・ポッドキャスト」「マイノリティフォーラム」「3.21 人種差別撤廃デー企画」「マイノリティ円卓会議企画」「ニュースレター発行」などのプログラムを計画しています。それぞれのプログラムについて適時ご案内しますので、どしどしご参加ください。2025 年度もどうぞよろしくお願いいたします。

お知らせ

からふるカフェでお会いした 4 人のお話を漫画とことばでお伝える「カラフルな仲間たち第 6 集」は、この夏発刊の予定です。お申し込みは、マイノリティ宣教センターまで。（頒価 一冊 100 円＋送料）

マイノリティ宣教センター賛同会費
2025 年度分納入で活動を支えてください

マイノリティ宣教センターは 2017 年、強まる在日コリアンへのヘイトスピーチへの抗いを、さまざまな形で生み出そうと活動することを求めて創設されたエキュメニカルなキリスト教団体です。

海外教会をはじめとして、熱い賛同と数多くの支援の意志が示され協働が実現してきました。マイノリティ宣教センターの活動を積極的に支援する会員となっておりますようよろしくお願いいたします。

個人会員：年会費 一〇 3,000 円
団体会員：年会費 一〇 10,000 円

●ゆうちょ振替口座
00160-6-487170 マイノリティ宣教

※ 他行からの場合は以下の通りです。
●銀行名 ゆうちょ銀行（金融機関コード 9900）
店番 019（〇一九）
当座 口座番号 0487170
マイノリティ宣教

マイノリティ宣教センターニュース 第 25 号
2025 年 3 月 31 日発行
発行者：李省展
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 52 号室
TEL: 03-6228-0509 Email: info@cmim.jp
デザイン・レイアウト：峯田敏幸



CMIM NEWS
Center for Minority Issues and Mission
Spread the Tent of Inclusivity! 共生の天幕を揚げよう！

マイノリティ宣教
センターニュース
vol.25 2025 年 3 月

E-mail : info@cmim.jp URL : https://cmim.jp

違っていい

すずき みつこ
鈴木 美津子

日本キリスト教会 人権委員会
マイノリティ宣教センター 運営委員



さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいをせず、心をつにし思いをつにして、固く結び合いなさい。（コリント一1:10）

1946年に出版された『菊と刀』の著者であるアメリカの人類学者ルース・ベネディクトは、日本の文化の特徴は「恥の文化」とであると称しました。「恥の文化」は、他人がどのように思うかを気にかけながら、人から見られても恥ずかしくない行動を基準とする文化のことです。日本人は恥をかくことを嫌います。特に人前で恥をかきたくないのです。ですから、恥をかかないような行動をすることが重要視されます。ちなみにキリスト教文化を中心とする欧米などは、神との契約による「罪の文化」とであると称されています。「罪の文化」では、人ではなく、神の目を気にして、自分の良心に忠実に生きることを基準とする文化です。

「恥の文化」は、江戸時代からの「村社会」の影響を色濃く受け継いでいると考えられます。村社会では、集団から外れた行動を取ると村八分になることがありました。掟や慣習に従わずに不適切な行動を取った者や家族を、村全体で排斥したのです。この風習は？集団の調和を乱すことを許さないことが重要視されます。もちろん周囲との調和は良いことです。しかし、集団の調和を乱さないことを重要視することによって、他人との衝突を避けようとする、同調行動が生じやすくなることも事実です。集団という枠からはみ出さないようにする同調行動がもたらした結果が「日本は同調圧力が強い」ということです。この同調圧力が、仲間はずれや差別などの発生につながる可能性があるのです。

もちろん、同調することが全て悪いわけではありませ

ん。が、周囲の人と違う行動を取らないようにするために、たとえそれが間違っていると分かっているのでも無批判に周囲に合わせてしまう場合が多く、いじめや差別、ヘイトスピーチなどは、そのような中で起こっているのです。

これに対して、聖書は、それぞれが違っていいからこそ、支え合って共に生きることができることを教えています。新約聖書の書簡の最も多くを書き残した使徒パウロは、その書簡の中で繰り返し「一つ」という言葉を用いています。しかし、その「一つ」は、「みんな同じ」つまり「同調」という意味ではありません。むしろ彼は、それぞれに「違いがある」ことが大切であるというのです。私たちにはそれぞれ、神から違った個性や役割が与えられていて、聖書はこれを「賜物」と言います。人はそれぞれに違いがあり、まったく同じ人間は、この世に存在しません。違った個性や役割を与えられた存在が、足りないところを互いに補い合い、支え合って生きていくことで好ましい集団・社会が起こされるのです。違っていいからこそ、助け合い、支え合うことができるのです。

しかし、キリストの教会にも「同調圧力」は存在します。違いがあることが、ゆるせない、自分と相手との違いを受け入れることができない、というのが私たちの常だからです。「あなたも自分と同じになれ」と、相手を自分にあわせようとしてしまう。相手を攻撃し、「あなたは要らない」と排除する。それが、私たちの現実の姿でもあるのです。だからこそ、私たちが自分と違った存在を受け止めて、それぞれに大切な個性や役割があることを認めあって、差別のない社会を目指すことが求められているのです。

第7回マイノリティ・ユース・フォーラム in Mae Sot

メーソットでの出会いを振り返って

ノートルダム清心女子大学教員・カトリック信徒 おかだ くりこ 岡田紅理子

人間社会の境界はどうやって壊せるのかを考えてきました。しかし今回、国境という境界によっていのちと生活を守られる人々と出会いました。タイに逃げてきたミャンマー出身の人々です。



ミャンマー語の方が通じる宿近くの市場

タイでの生活も不安と恐怖と隣りあわせです。私たちが滞在していた宿近くでは、帰国前夜にミャンマー出身者が検挙されたといひます。それでも、メーソットで出会った人々は、しなやかに生きているようにみえました。ネットワークを拡張し、子どもを移民学校に通わせ、基礎的な保健医療を整備し、自らの経験と想いをメディアで発信しています。タイの社会保障制度から弾き出されて

いても、できることをわかしあい、暮らしをなんとか維持しています。かれらのしなやかさは、弾圧と避難の経験から否応なしに絞り出された営為なのでしょう。



移民学校で出欠確認をとられる子どもたち

人間がつくり出した境界は、特権を専有するために濫用される反面、私が私であるというアイデンティティを守ります。問われているのは、人間の非対称性と権威・権力勾配を支え、強化する、境界内での自分のポジショナリティなのでしょう。

今回の出会いに心から感謝します。そして、かれら一人ひとりの顔と交わした言葉を思い出しながら、かれらのいのちと暮らしが守られ、つぎは自由と平和が訪れたミャンマーで、笑顔で再会できることを信じ、祈り続けます。

「国境の町」からのメッセージを聞いて

マイノリティ宣教センター運営委員

マキン サンサン アウン

この旅は今までの人生で経験したことのない旅でした。私たちは二つの学校と病院メータオクリニック、その他に多くの場所を訪問しました。ジャーナリスト北角裕樹さんにもお会いし、ミャンマー現状や活動動画などを見て話を聴く大きなチャンスが与えられました。世界中から注目されているメーソットでしたが、そこにあるのは他に見なければならぬはずの大変さでした。

神学校や大学で教える先生、医者、弁護士をはじめ、胎内にいる子どもまでが逃げ、隠れていることから、「国と国」の境界線とは何かと問われました。しかし、痛みと辛さを背負い生きている人々には、まぶしいほどの輝く光があると思いました。

夫を亡くし長男が徴兵制度で連れて行かれ母親は次男まで失いたくないと思い国境を越えた話、国境を渡ろうとするがタイ側で待ち伏せされ、ワイロをとる警察や、ミャンマー軍の元へ送り込まれる恐怖の中で命をつなぐ者たちの話、地雷を踏んで足を切断した人の話、病院までいけずに、在留の許可を持っていないため、家での出産した方の話、これらの話を聞きました。

お祈りいただき、ありがとうございました。

2025 年国際人種差別撤廃デーを覚えて NO! RACISM! ひろば に参加して

こまびいす たんの のぶこ 日本バプテスト同盟 駒込平和教会 丹野信子

3月8日、日本聖公会聖アンデレ教会を会場に全国各地から集められた14団体(うち6団体は音源・映像)の“声”

と“歌”と“表現”が豊かに発せられ、聞くものたちの心が震える時となりました。被曝者、ハンセン病、外国ルーツ。心の奥に隠している差別・被差別感、また無関心だった自分の在り方にも気づかされ、心地よくもあり、刺激的であり、思わず「かわいい！」と言ってしまうお歌もあり、実に多彩なパフォーマンスの数々でした。音楽と



ハーモニーとリズムと、時に叫びにもメッセージと祈りが込められており、この“ひろば”に導かれ集められたこ

かろう こひさ 久我山ベルリンガーズ 日本基督教団久我山教会 加納小久

日本という国は、民族的に同一であり、人種差別はないと思っていた時期がありました。

中学生の頃、「コタンの口笛」というラジオ放送を聞いた時、日本の中での人種差別を初めて知りました。沖縄返還の頃、言うに言われぬ沖縄、琉球の人々の差別を知りました。朝鮮人部落のこと、その歴史等、多くの差別があることを知りました。

昨年、沖縄の慰霊祭に参加してきました。私たちは沖縄の人たちと心をつなげて歴史を学び、共に祈りたい

大勢でも、一つの体

日本聖公会聖アンデレ教会牧師 たく じうん 日本聖公会管区事務所 宣教主事 卓志雄
マイノリティ宣教センター運営委員

3月8日(土)に開かれた「NO! RACISM! ひろば」が神によってよいものとして祝福され導かれたことに感謝いたします。

あらためて感じました。「音楽の力は強い！」祈りをのせてささげた音楽はより豊かで強いと感じました。聖アンデレ教会の両側にあるステンドグラスをみながら、「NO! RACISM! ひろば」は主によって用いられるために、また主による平和を実現するためにささげられた祈りだとあらためて感じました。

ステンドグラスはいろんな色、いろんな形でつくられています。形も色もばらばらだったかもしれないけど、同じ系列の形と色が一つに合わせられ、聖アンデレ教会

とに感謝しました。

ニュースでは、大きな国の大きな人たちが、毎日甚だしい差別・偏見発言を発しており、私は人として、また個別の教会としてどう祈り、どう生きていくのか?この流れの中で悲しむ人、希望を失いそうになる人はどこにいて何を思い願っているのか?そんなモヤモヤを抱える日々を過ごしています。差別撤廃!と叫び連帯する時、私たちは恐れず言葉を歌にし、音に乗せて世に向かって発する。それは風に乗れ、ときを超えて自由に誰かの元に届いて希望に変わることを信じたいと思います。企画準備を担ってくださった皆様に心から感謝申し上げます。

と思ったのですが、きれいごとでしかなかったのをひしひしと感じて帰ってきました。同じ立場に立つということとはとても難しいことなのではないでしょうか。

普通に生活していても男女差別、能力、学力の差別等感じることもあります。この頃言われるセクシュアルマイノリティのことなど、知らなかったことがたくさんあり、その立場にいる人がひそかに苦しんできたのだということもやっと近頃気づかされました。

ノー!レイシズム!ひろばに参加して、マイノリティ宣教センターのお働きを知ることができて本当によかったと思っています。また参加なさった方々の草の根のお働きも感じる事ができました。何より楽しい2時間でした。感謝です。ありがとうございました。

では美しい「木」になっています。当日演奏者として参加された14団体のメンバー構成、メンバーの宗教、教派、性別、年齢、国籍・・・、演奏に用いた楽器、音楽のジャンルなどは実にバラバラでした。しかし主によって集められた一人ひとりの思いは一つでした。神に象って創られたわたしたち一人ひとりは尊い存在であること、人種、国籍、民族、障害、宗教、性的指向、性別、病などの理由によるあらゆる暴力や差別はあってはならないこと、また暴力や差別があった場合、わたしたちはそれらに立ち向かっていくという思いをあらわす時間でした。皆の歌声、演奏、拍手、祈りが神によって合わせられ素敵な木になっていました。

パンは一つだから、私たちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンにあずかるからです。(コリントの信徒への手紙一 10:17)